

オールは、重量、重心、全長とてこ比、ブレード形状、バンド、ピッチ、ハンドル形状とサイズなどが計測要素として重要です。

1 重量と重心 Weight and Center of gravity

重量: オールの重量は軽いほど良いです。
 注: 昔のオールは重たく、(少しのメリットとして)手の重量を支えてくれました。言い換えればフォワードでは下に抑えなければなりません。それで、キャッチでは、手の体重を抜くことでブレードが自然に下降し、ブレードの浮力で良い位置に安定しました。動作イメージは大切でも、その技術論は、現在の軽量オールではあまり適用できません。ブレードの重さやブレードの浮力が異なっているのです。オール任せにできない面があります。
重心: 同じ重さでも、同じオールの重心はなるべくカラーに近い方がよいです。慣性モーメントを減少させることができます。



重心の計測は簡単。乗せた手をゆっくり近づける。

2 全長 Over all length

オールのハンドル端から、カラーのフェイスまでの長さをインボードといいます。これより外がアウトボードです。アウトボードはワーク高とともにシャフトと水面のなす角度に影響を与えます。長いオールほど水面との角度が減少し、ローリングに対する適応性が減少しますが、一方でハンドルの軌跡は直線に近づきます。
 全長を変更(調整)可能な可変長タイプのオール(アジャスタブルハンドル)が、1990年代後半から登場し、主流となりつつあります。インボード側のシャフトが二重構造になっていて、長さを調整できます。コンセプト2では、1cm間隔で孔の開いたウェッジを、ハンドル側の突起に合わせて組み、本体側に滑り込ませ、2本のネジで固定する構造となっています。クローカーは、より単純な構造になっており、無段階に調整できます。



コンセプト2の可変長オール(アジャスタブルハンドル)

3 てこ比 Leverage

オールの負荷の大きさの目安となるテコ比(ロードレシオ)は、普通アウトボード/インボードの比率で表されます(なお、分母を、スプレッドとする場合もあります)。これはカラーの位置を変えることで調整できます。インボードは、スプレッドの設定と関連

しながら、ハンドルの軌跡(左右動)と負荷の大きさに影響します。インボードの一般的な値は、スイプで110cm前後、スカルで85~90cm前後です。

インボードの調整は、ギア比の変更とハンドルの左右位置、アークの調整のためです。

カラーはネジ止めされているだけなので、簡単に緩めて調整可能です。カラーは緩まないようにしめなければなりません。だからといってきつく締めすぎると、カラーやスリーブの変形・損傷を惹き起こします。半割りの二つを完全に密着するまで締めこむのではなく、溝に正しくはまっていれば、大丈夫です。

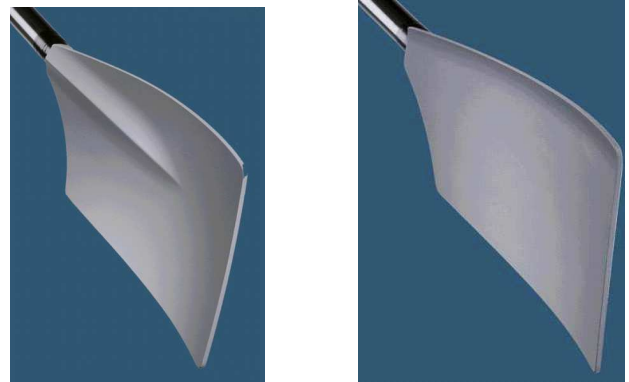
4 ブレードの形

1959年に出てきた、それまでより太くて短い「マコン」と呼ばれるブレードが、1990年までの主流でした。対称形状のひとつの事実上の到達点ともいえます。

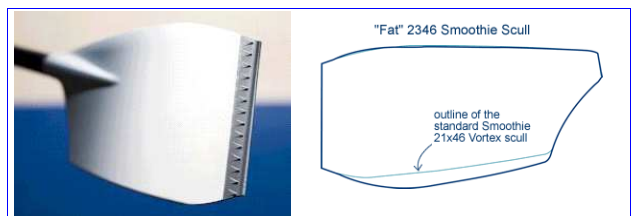


マコンブレード(ブラーチャのウェブサイトより)

しかし1991年に、「ビッグブレード」が登場しました。非対称ブレード時代の始まりです。その後、シャフトに続くリッジをなくして上縁を前に被せたスムーシー、裏側の流れを制御するためのボルテックス・エッジなどが次々と登場しました。ブレードは少しずつ進化しています。



ビッグブレードとスムーシー



ボルテックスと、FATブレード

5 ブレードピッチ (ピボットテーパ) Blade Pitch

ブレードピッチは、オールのブレード面とスリーブのフェイスのなす角度のことです。そのオール固有のブレードカバー角となります。マコンでは、単純に定義できるが、ビッグブレードでは、チップ(先端)ではなく、特別の計り方をします。ブレード形状によって、正しい測定をしなくてはなりません。